

## フィリピン中部台風復興支援事業（セブ北部総合復興支援事業）報告

国際医療救援部 国際救援課 李 壽陽

（派遣期間：2016年10月11日～12月21日）

2013年11月、フィリピンのビサヤ地方を台風30号（現地名：ヨランダ）が襲い、現地に大きな爪痕を残しました。日本赤十字社（以下、日赤）は発災直後から医療保健分野の緊急救援をセブ島北部に派遣し、2014年4月から同地域で復興支援事業を3年間にわたりフィリピン赤十字社（以下、フィリピン赤）とともに実施してきました。この事業では、住宅建設、生計支援、地域保健、防災研修、学校での給水システム整備などの分野において、セブ島北部に位置するダアンバンタヤン郡の5つのバランガイ（フィリピンの最小行政単位、村に相当）を包括的に支援しました。



私にとって、同事業は2度目の派遣でした。半年前まで暮らしていた活動拠点地であるセブ島北部ボゴ市の発展は目覚ましく、中華系レストランのチェーン店やおしゃれなカフェが営業し、道中には自動車が増えて、朝の通勤時間帯には渋滞を引き起こしていました。マクドナルドの開店初日には、暑い天気の中長蛇の列ができていました。この街へ再度派遣され、都市化の波が確実にこの地域にもすさまじい勢いで押し寄せていることを実感しました。

建設中のマクドナルド（ボゴ市）

今回の派遣期間中、現地では2017年1月末の事業完了に向け、事業の効果をはかるためのモニタリングや活動終了時の評価といった事業終盤の活動が、慌ただしく行われていました。また、これまでの活動をフィリピン赤セブ支部および地元地域へ移行するための引き継ぎも、同時に行われていました。

このような事業終了を目前に控えた時期でしたが、約2か月の短い派遣期間であったこともあり、機会を見つけて事業地へ足を運びました。そうすることで、前回派遣時以降の現地の様子や



生計支援事業の一環で作った魚網で漁をする漁師

人々の「今」の生活状況を見ることができました。その際に、地元地域の人々やフィリピン赤スタッフ、ボランティアと再会できたことは、初めての派遣地では味わうことのない嬉しい経験でした。



住宅再建支援先で事業終了に向け調査を行うフィリピン赤ボランティア

派遣先での主な担当業務は、事業を終了するために必要な事務管理や調整でした。例えば、事務所や職員宿舎、事業車両等の契約書を再確認し、事業の終了時期と照らし合わせて契約期間や内容について変更する必要があるかを検討しました。変更の必要があれば、所有者との交渉をフィリピン赤の事務経理担当職員と行いました。中でも、建築資材の保管倉庫は同意

していた土地の借用期間を半年以上も過ぎてなお使用されていたため、一日も早く所有者へ返還しようと、フィリピン赤スタッフとボランティアと共に片づけを進めました。



倉庫の大掃除を行うフィリピン赤十字職員とボランティア



掃除のあとの記念撮影

今回の派遣で一番大がかりな業務は、事業備品類を把握してそのリストを作成し、フィリピン赤へ寄贈する準備を整えることでした。5つの分野を三年間かけて支援する事業だけでなく、関わった職員やボランティアの数も多く [日赤要員 3 名、現地職員 9 名、ボランティア 24 名 (2016 年 12 月現在)]、必然的に備品数も多い印象でした。さらに、事業期間中には職員の入れ替わりや宿舎・事務所の移動があり、モノの動きやその経緯の把握が難しく感じることもありました。定期的な備品管理の必要性に対するチームの深い理解があれば、事業終了直前の現地赤十字社への寄贈や引き継ぎ業務は、よりスムーズになるのではないかと考えます。一方で、このような業務をフィリピン赤職員と協力して進めたこ

とにより、事業完了を控えた多忙な時期の一助となれたのではないかと振り返ります。

今回の派遣期間中の事業地訪問を通して、地元地域では台風からの復興や生活再建にとどまらず、将来の自然災害への備えに対して人々がより強く意識するようになっていると感じました。フィリピンの人たちが今後も地域の中で協力しながら災害への対応能力を強化していくことを願います。

平素より日本赤十字社の国際活動へ多大なるご理解、ご支援を賜り感謝申し上げます。



訪問先の小学校で、生徒の宿題を見せてもらい質問しているところ